

## 後援会副会長挨拶

# 職業を決めることの難しさ

自分が希望する職業を早い時点で決めることは本当に難しいことである。今の時代、それを早い時期に決められるのであれば、早ければ早い程、良い様に思う。中学・高校時代に決められた人はそれに向かって、必要な学問、知識、経験、スキルを得る為に必要な進路を決められる。大学に進学する場合には、学部だけでなく、学科や所属する研究室まで決められる。高校時代に決められなかった人は大学生活を送りながら、講義、部活、サークル、アルバイト、趣味等、色々な経験をしながら、なりたい職業を探すことになる。「趣味と実益を兼ねる」というが、自分の興味のある分野の職業につき、一生を通じて自己実現をするというのは現実的には稀なことであり、実際にそれが出来ている人はどれ位いるのだろうか？専門性が高い特殊な職業や自営業、芸能人等々、極めて限られている。企業に就職した一般的な会社員は、恐らくそうではない部類に入るのではないかと思う。但し、大学で学んだことに興味を持ち、技術系もしくは研究者としてそれを活かせる企業の研究開発部門や技術系の仕事に就けた人の中には当てはまる人も居るだろう。

私はというと、高校時代に将来なりたいと思えるような職業もなく、理系科目だけが比較的得意であったことから止むを得ず理系を選択し、大学の工学部に進学した。なりたい職業をイメージできないまま9年間も大学に通った後、大学の先生になることを選択せず、企業に就職した。学部、修士課程、博士課程と進学するにつれて専門性が高くなり、専門性を活かせる職業の選択肢がどんどん絞られて行った。学生の時はそのようなことを考えなかったが、後になって考えると正にそうであった。研究が本当に好きなのかどうか自分では分からないままに私は何となく企業の研究所(コーポレート機能の研究所で基礎研究を主に実施しているところ)を選択した。企業の研究所に入った後、27年間に渡り、好きな基礎研究を自由にやれたことは本当にラッキーなことであった。しかし、研究者になって良かった、なりたい、続けたいと心から思えるようになったのは、企業の研究所に入って1つ目に取り組んだ研究が成功した時である。この時が、自分が就きたい職業を本当に決めることができた瞬間と言える。成功体験の大切さを正に実感したことになる。本当なら遅くとも大学時代には決めなければならぬのに、30歳になって漸く<sup>ようやく</sup>本当の意味で職業を決められたことになる。

私のようにならない為にも、本誌を読まれた学生の皆さんは、遅くとも大学時代に自分のなりたい職業を決めて欲しい。長い人生を有意義に過ごす為にも生き甲斐、遣り甲斐、趣味は大切であり、学生時代が終わる前にはぜひ1つは見つけて欲しいと思う。気が付いてみると、楽しい大学時代は、何も出来ないでいるまま、あっという間に過ぎ去ってしまうものである。



東京都市大学  
後援会副会長

水谷 悟